

物語と歴史のあいだ

野家啓一のえけいち

内容理解

この文章で筆者は、歴史について、小林秀雄・川田順造両氏の引用を踏まえて論じ、常識を覆す指摘をしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇「物語りえないものについては、沈黙せねばならない」

・過去の出来事や歴史的事実について考える場合、このテーゼは背理を孕んでいる。

〈具体例〉光源氏ひかるげんじが葵あおいの上を妻に迎えたという出来事は、『源氏物語』という言語作品を離れては意味をなさないので、源義経みなもとのよしつねが静御前しずみかみを妻に迎えたという出来事は、『平家物語』という作品の成立とは、
に存在する歴史的事実だと考えられている。

歴史的事実と考えられていることについても、私は、歴史を物語るという言語行為、すなわち、「物語行為」を離れては意味をなさず、また存在しえないと主張する。

◇「物語る」という言語行為

・全ての歴史的出来事を、ありのままに描写できる超人的な歴史学者がいたとしても、彼の「年代記」は歴史叙述の基礎²
とはなりえても、「歴史叙述」とはなりえない。そこには出来事と出来事をつなぐ脈絡、すなわち「³
」が欠落しているからである。

〈小林秀雄『無常といふ事』の引用〉記録するだけではいけないだろう。思い出さなくては
いけないのだろう。多くの歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を⁴
一杯にしているので、心をむなくして思い出すことができないからではあるまいか。

・ここに見られる「記憶」と「思い出」との対比は、「理想的年代記」と「歴史叙述」との区別を際立たせる。思い出は過去の出来事のありのままの⁵
ではない。それは経験の遠近法による濾過と⁶
を通じて一種の「解釈学的変形」を被った出来事である。しかし、思

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

擁護（三二四・五）

面妖（三二四・八）

温顔（三二五・二）

喝破（三二五・13）

い出されただけで消えていくなら、思い出は甘美な個人的感懐であって、
な歴史ではない。「物語行為」による媒介が不可欠である。

「物語る」という言語行為を通じた思い出の構造化と共同化こそが、
ほかならぬ歴史的事
実の 条件である。歴史的事実は「客観的事実」であるよりは、むしろ物語行為
によって媒介され、変容された「解釈学的事実」である。

◇「物語りえないものについては、沈黙せねばならない」

・文献資料は言語による記述であることによって、 の遠近法が働き、情報の取捨選
択を経た「解釈」の産物であり、考古学資料も「解釈」に汚染されている。

〈川田順造の引用〉それをこしらえた人は、自然の素材に対する人間のある「解釈」と働きか
けの結果として、その土器を作り出した。

・物語 は、想起された出来事を時間系列にしたがって配列、それらを「物語」のコ
ンテキストの中に再配列することによって、歴史的事実を構成する。

「歴史」と「物語」とは、表裏一体のものであり、物語行為こそ、われわれの歴史意識を構成
する最も原初的な言語活動なのである。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまと
めてみよう。
〈指定語——歴史・物語・事実〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の
書籍やインターネットなどを使って調べてみよ
う。

・ウイトゲンシュタインの哲学とは、どのよう
なものか。

・小林秀雄には、どのような著作があるか。

・川田順造とは、どのような人物か。

100